

## 溺れている妻と母

大きな池であなたのお母さんと妻が溺れ（おぼれ）ています。二人とも泳げません。こんな時、あなたはどちらを先に助けますか？ と問われるとあなたはどのように答えますか。

育ててもらったことを考えると「母が先だ」「これからの人生を考えれば妻が先だ」という価値観の中で答えを出そうと考えてしまいがちです。

この法話をしていた老師が、聴衆からその答えを求められて「私は近くにいる方から助けます。」と答えたそうです。

なるほどこの考えは執着を離れた、仏教的な考え方といってよいでしょう。自分の都合でものを判断してみたり、自分本位のこだわりは、迷いを生んでしまう原因になってしまいます。

「縁起」が分かると、「無我」について知ると、人生の違う風景が見えてくるかもしれません。

釈迦の出家時のお話をします。

釈迦は釈迦国の王子として大切に育てられていましたが、ある日突然、妻を残し、城を出て修行僧になります。

そのとき妻は妊娠していて、そのことを釈迦に告げますが、釈迦は「私の出家を誰もとめることはできない、私の決意に変わりはない」と宣言をして出家します。

妻は息子、ラーフラを産んだあと一週間後に亡くなってしまい、妻の妹が乳母としてラーフラを育てます。

後にラーフラは釈迦の十大弟子の一人になりましたが…

その時代、もし SNS があったとすれば大炎上必至だったことでしょうね。

出家をした釈迦は、弟子たちと竹林の中に住みますが、やがて城が滅亡したとの知らせが入ります。もともと釈迦は、釈迦族のお城に住む皇太子で、王様である父親の跡継ぎでした。

その父親とラーフラ（息子）がやってきて「弟子になりたい」といいます

釈迦は出家時に国を、家族を捨てましたが、  
父親が嫌いだったわけでもなく子どもを疎んでいたわけでもありません。  
ですから迎え入れ、みんなと同じように扱いました。

ラーフラを育ててくれた妻の妹も釈迦の弟子となり、比丘尼（びくに）第一号となりました。  
比丘尼とは女性の出家信者のことです。

その後も一族がどんどん入ってきて、釈迦の弟子になりますが、釈迦は受け容れます。

ただし、特別扱いをしませんでしたし家族という構成もしなかった、これが釈迦の「出家」でした。

せっかくの家族の意味がないじゃないか、薄情だとの声が聞こえてきそうですが間違いなく、一般的な現代の家族より平和な心と愛に包まれていたと思います！

いま大事なのは、自分の目の前にいる人なんです。

目の前にいるのが家族なら家族が大事。

しかし、家族だから大事なのではなく、いま目の前にいる人が、もっとも大事なのだと、そんなことを教えてくれているのではないかと思います。

今の私たちに理解できないものこそ本物かも！の考え方が、逆にできると思いませんか。

自分の都合や価値観で判断するのではなく、一切のこだわりを捨てて事に当たれば良いと言っているのです。

心静かに、自らのこころの扉を開き、自分の日頃の判断が執着に依っていないかどうか、自分本位になっていないかどうか、考えて見ましょう。

皆さまの心の源底にある他者に対する自由で平等な慈愛の精神に気付くことでしょう。